

『神のみこころと4種類の反応』

'20/10/18

聖書箇所: マルコの福音書 4章 1-20節 (新約 p.70-)

今年、2020年になってから、私たちは「マルコの福音書」を少しずつ学んできております。今日から、マルコ4章になるわけですが、ここで、イエス様は、ある有名な例え話を使って、私たちが知らなければならない重要な真理について教えてください。じゃあ、その「重要な真理」とは、一体、どのようなものなのでしょう？…それは、「神様のみこころ」に関することです！皆さんは、神様のみこころを知りたいとは思われませんか？…しかし、神様のみこころというものは、すべての者たちに対して、平等に…、あるいは、均一に…、明らかにされるものではありません。どうか、今日のみことばもまた、大切なことが教えられてあるがゆえに、真剣に耳を傾けていただきたいと思います。

命題: 聖書のみことばに対する、「5つの態度」とは？

今日、皆さんと一緒に学んでいきたい、聖書のみことばは、マルコ 4:1-20 になります。多分、もう皆さんは、聖書のみことばを開けてくださっていると思いますが、そのみことばから、今日、私たちは、聖書のみことばに対する、「5つの態度」というものを観察していきたいと思います。今日、このメッセージを聴いてくださっている皆さんは、今から見ていく、4つの土壌の内、いずれかに属している！ということ、今日のみことばは教えてくれています。果たして、あなたは、どの種類の土壌で…、そして、どういったような結末を迎えるのでしょうか？願わくは、私たちの、この聖書に対する思いや姿勢が、ますます、神様の前に正しいものとされていって、私たちの生き方が変えられていくことを期待しています。

まずは、今回のみことばの前半となる、マルコ 4:1-9 までを、こちらで読ませていただきます。そこには、このように記されています。

- 1 イエスはまた湖のほとりで教え始められた。おびたしい数の群衆がみもとに集まった。それでイエスは湖の上の舟に乗り、そこに腰をおろされ、群衆はみな岸への陸地にいた。
- 2 イエスはたとえによって多くのことを教えられた。その教えの中でこう言われた。
- 3 「よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。
- 4 蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった。
- 5 また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。
- 6 しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。
- 7 また、別の種がいばらの中に落ちた。ところが、いばらが伸びて、それをふさいでしまったので、実を結ばなかった。
- 8 また、別の種が良い地に落ちた。すると芽ばえ、育て、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。」
- 9 そしてイエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい。」

I・道ばたと表現された人々(4, 15節)

まず、最初に語られているのは、『道ばた』と称されたあるグループです。これは、一体、どういう人たちのことを指しているのでしょうか？…そのしばらく後で、イエス様が弟子たちの質問に応じて、解き明かして下さった後半部分も、併せて参考にしていきたいと思います…。マルコ4:15で、イエス様は、『道ばた』と称された者たちのことを、こう説明してくださっています。

- 15 みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。

●『道ばた』の特徴

イエス様がこの話をされたのは、『湖のほとり』であったと、このみことばは教えてくれていますので、恐らく、ここで言われている湖とは、あのガリラヤ湖であろうと思われます。…その時、イエス様の周りには、いつも通り、たくさんの方々が集まっておりました。実際、今日のみことばには、『“おびたしい数の群衆”が…集まった』ということが記されています。そこで、イエス様は、マルコ伝 3章でも見たように、舟の上に乗って、そこから群衆に向かって話をされます。それが、今読んだ 3-9節の“例え話”であります。

さて、ここでイエス様が問題にしておられるのは、蒔かれた“種に関する良し悪し”ではありません。…そうですね？ここでイエス様が問われているのは、蒔かれた種が良いとか悪いとかではなく…、蒔かれた土地(=土壌)の良し悪しに関する話がなされているのです。まあ、そういったことで…、このみことばは、時々、「4つの種の例え」と呼ばれることがあるのですが、正しくは、「4種類の土壌に関する例え」などと呼ぶべきかも知れません。だって、私たちが注目すべきは、蒔かれた種の良し悪しではなく…、それを受けた側の「土地の良し悪し」であるからです。そうじゃないでしょうか？

では、イエス様が、ここで言われた土壌…、つまり、土地とは何を指しているのでしょうか？正直、それは、簡単です。…と言いますのも、イエス様は、この例え話の解き明かしを、今日のみことばの 14節以降で教えてくださっているからです。14節には、こうあります、『種蒔く人は、みことばを蒔くのです。』って…。また、マタイ伝 13章や、ルカ伝 8章でも、これと同じエピソードが記されています。皆さんには、開けていただかなくて結構なのですが、ルカ 8章で、イエス様は、こう説明してくださっています。ルカ 8:11-12、『11 このたとえの意味はこうです。種は神のこぼれです。12 道ばたに落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞いたが、あとから悪魔が来て、彼らが信じて救われることのないように、その人たちの心から、みことばを持ち去ってしまうのです。』って…。いかがでしょうか？…今日のみことばであるマルコ伝 4章のみことばでも、十分、明らかですが、ここルカ 8章では、もっと明らかに、イエス様が説明してくださっています。蒔かれた土地の状態とは、「みことばを聞いた者たちの心」を指しているのです！

当り前のことですが、今から 2000 年も前のこの当時、「道」と言っても、それは、アスファルトやコンクリートで舗装されているはずがありません。しかも、ここで言われている『道ばた』という場所は、まるで、種が風に飛ばされて、道ばたに落ちてしまった、というようなことを連想されるような場所のことです。そのような土壌は、多くの人たちによって、踏み固められてしまっているために、もう何物をも寄せ付けられないような「頑なさ」をイメージさせます。

ですから、ここで、『道ばた』(4, 15節)と称された者たちとは、その蒔かれた…、神様のみことばを聞きはするが、全く悟らない(=深く理解しようとしない)ので、そのみことばが効果をなすことなく、『サタン』(15節)によって、奪い去られてしまう、と言うのです…。確かに、このみことばが教えてくれているように、こういった方々が、ここ日本には多いように思われます。…と言いますのは、私たちが、何とかして、必死になって、みことばを語っても…、福音を語っても…、あるいは、教会や伝道集会にお誘いして、その人たちがみことばを聞いてくださっても…、それを受け入れてくれないばかりか、大した関心も持たずに、すぐに忘れてしまう…。皆さんにも、そういった経験があるのではないのでしょうか？

●その原因

では、一体、何が問題なのでしょう？どこにその原因があるのでしょうか？⇒ここで、イエス様が教えてくださっていることは、サタンが来て、せっかく聞いた“みことばの種”を持ち去ってしまう、ということです。…ですから、サタンに、その問題の一端があることは間違いありません。…しかし、じゃあ、サタンだけが悪いのでしょうか？⇒いいえ、私は、そう思いません。…と言いますのは、イエス様が、このグループの方たちを、『道ばた』と称されたのは、そもそも、彼らに“頑なさ”という問題があったからと思うからです。

…と言いますのも、ここに記されてある、4つの土壌の内、他の3つは、みことばを聞いた後、何らかの行動や反応があるのに対して…、この『道ばた』と称された者たちだけは、何の変化も…、反応も無いのです。…彼らの心は、あまりにも頑なになってしまっているのもう、何も寄せ付けられないような頑固さがあるのです。それこそ、『道ばた』と称された者たちの問題ではないでしょうか？

II・岩地と表現された人々(5-6、16-17節)

次に教えられているのは、『岩地』と称されているグループです…。では、これは、具体的に、どういった者たちのことを指すのでしょうか？ イエスは、その解き明かしを、16-17節で、こう説明してくださっています。

- 16 同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、
17 根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。

●『岩地』の特徴

『岩地』と称された者たちの特徴についても、比較的、明確に教えられてあります。16節にあるように、『みことばを聞くと、すぐに喜んで受ける』者たちのことです。でも、その一体、何が問題なのでしょう？ ⇒続く17節をご覧くださいますと、『根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。』とある通りです。そこが問題なのです…。

現在もそうなのですが…、このパレスチナのある地方は、非常に荒地で、石や岩がゴロゴロ転がっているような土地です。ですから、種を蒔いて…、せっかく芽が出てきても、実は、そのすぐ下に大きな岩の層があって、すぐに枯れてしまう…、なんてことも、頻繁に起こり得るのだそうです。

実は、そのような、『岩地』と称された者たちの特徴を観察してみますと、この『岩地』特有の表現があるのです。…それは、何だと思われませんか？この『岩地』に限られた特徴&表現とは？⇒それは、『すぐに』とか、『喜んで』という言葉です！ 今日のみことばを見てみますと、たった4節しかない説明の内、5節と16節、17節という風に3回も、『すぐに』という言葉が使われてあります。また、16節をご覧くださいますと、『すぐに喜んで～』とあることに気付かされます。つまりは、非常に、「感情的」なのです。いえ、もちろん、感情が悪いわけではありません！

●その原因

じゃあ、一体、その人の何が問題なのか？と言うと、その人の信仰？が、“感情によって”支えられてしまっているということに、問題があるのです。皆さん、覚えてくださっているでしょうか？ I コリント 15:1-2 のみことばも、『1 兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。2 また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。』とあるように、私たちは、しっかりと知性を働かせて…、理性を保って…、この聖書が教えてくれている神様のことを正しく理解した上で…、そうして、信仰を持たないといけないのです。だって、聖書が教えてくれている信仰は、決して、いい加減な教えや盲目的な教理じゃないからです！ そうですよ？ 皆さん？

しかし、ある方々は、聖書のみことばを聞いて…、福音を聞いて…、感情だけが先走ってしまっ…、『すぐに喜んで』、神様のことを信じ、受け入れるのですが…、でも、それが、本物の信仰ではないため、『すぐにつまずいて』しまうのです。その人の問題は、感情が根拠になっているが故に、感情的な高揚と言うか…、気分が乗らないと教会に来ないし、何かが進まないと、神に従っていいところではないと…、そうして、やがて、教会にも来なくなってしまうのです…。

非常に残念なことは、その人の信仰？が、聖書の正しい理解や強い意志でもって支えられているのではなく…、感情的なもので支えられてしまっているということもそうですし…、また、現代のキリスト教会も、そのような傾向を助長するかのよう、教会で語られている福音のメッセージが、喜びや希望…、あるいは、その人の価値や自尊心などといったような…、二次的なものが優先されてしまっていて、1番肝心の、真の造り主なる神様や、その神様が忌み嫌われている罪や神様の怒り、裁き…、また、神様への献身や従順、そういったものが別のものに置き換えられてしまっているという現実です。

実は、数年前のことですが…、ある他の教会の方と話をいたしましたら、その方が、「神様とは、私たちが信じるだけでなく…、私たちが従わないといけない主権者でもある！ だって、聖書には、『…あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。…』(マタイ 11:29)ということが教えられてあるでしょう？」と言ったら、それを聞いた、別のある方は、「いいえ！ 私の信じている神様は、そんな方ではありません！」と言って、怒って、もう教会に来られなくなってしまったのだそうです。

このように…、残念なことには、この世の多くの方たちは、自分が信じたいような…、あるいは、自分が気に入るような神様を探し求める傾向にあります。しかし、それは、真の神様ではありません！ 真の神様とは、私たちが、気に入ろうが、気に入るまいが、神様なのです！ そうでしょ？ …私たち人間に問われているのは、「あなたは、この御方を信じますか？ 受け入れますか？」ということのはずなのです。

III・いばらの中と表現された人々(7、18-19節)

3つ目に教えられているのは、『いばらの中』と称されている者たちです。これは、どうでしょうか？ イエスは、その解き明かしを、18-19節で、このように説明してくださっています。

- 18 もう一つの、いばらの中に種を蒔かれるとは、こういう人たちのことです——みことばを聞いてはいるが、
19 世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。

●『いばらの中』の特徴

これは、恐らく、こういった状況のことを説明してくれています…。種蒔きをする前に、当然ながら、荒れた土地の草刈りなどの作業をします。その草刈りをした後、一見、雑草などは見当たらないのですが、土の中には、まだ、いばらなどの「雑草の根」が残っているような状況です。種を蒔いた時は分からなくても、しばらくすると、期待していた作物よりも早く、いばらの方が成長してしまっ…、結局、そういった雑草などによって、蒔かれた種が十分には成長しない…、実を結ぶまでには成長していかない…、そういったような状況です。

つまりは、信仰(と言ってしまっ良いのかどうか?)が成長するよりも早く、この世の様々な誘惑や、富との選択・葛藤などがあって、結局は、この世や富などの誘惑に負けてしまう人たちのことです…。要は、真の神様以外に大事なもの…、優先したいものがあるのです。だから、神様から離れていってしまうのではないのでしょうか？

●その原因

では、こういった人たちの問題点は何でしょう？⇒イエス様は、ちゃんと、そのことも教えてくれています。それは、『みことばを聞いてはいるが、世の心づかひや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐ…』とあるように、そういったものが、神様への愛や神様への思いよりも勝ってしまっている点です。申し訳ありません。きっと、この人たちは、信仰に関する理解はあっても、神様によって、本当の意味では、変えられていないのではないのでしょうか？…だから、彼らは、神様のみことばである聖書を聞いても、それよりも、この世のことや富のことが優先されてしまっているがゆえに、実を結ぶことがないのです。例えば、イエス様は、**マタイ 6 章**で、こう教えてくださっています。『**24 だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません。**』って…。

また、使徒ヨハネも、それと同じようなことを、こう教えてくれています。『**ヨハネ 2 章**、『**4 神を知っていると**言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。(⇒つまりは、救われていない?) … **9 光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。(これもまた、救われていない?)**』』ということを教えるわけです。…もちろん、私たちは良い行ないをする“から”救われるのではありません。“救われたから”、良い行ないをする者へと変えられていくのです。そうでしょ？…ですから、本当に救われた者と、聖書が教える「良い行ない」とは、決して無関係ではないのです。

IV・**良い地**と表現された人々(8、20 節)

4つ目に教えられているのは、『**良い地**』と称されている者たちです。これに関して、イエス様は、その解き明かしを、20 節で、このように説明してくださっています。

20 良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人々です。』

●『良い地』の特徴

『**良い地**』と称された人たちの特徴も、明確です。まず第1に、多くの『**実**』を結ぶ、ということですよ。しかし、ここで語られているところの『**実**』が何を意味するのかが、難しいところです。…恐らく、ここで言われている実とは、「御霊の実」などといったような、神様の喜んでくださるもの全体と考えて良いのではないのでしょうか？…と言いますのは、御霊の実や、救われた者たちが、神様に喜ばれるような生き方をしている、ということは、聖書の他の箇所でも、明らかに教えてくれているからです。

また、『**良い地**』と称された人たちの特徴はそれだけでなく…、第2に、「みことばを聞いて、それを“受け入れる”』ということですよ。ここで、「受け入れる」と訳されてある言葉(παράδεχομαι)は、結構珍しい動詞で、新約聖書全体で 6 回、福音書では、ここでしか使われていません。その意味するところは、「(好意をもって)受け入れる、迎える、受理する、承認する、採用する…」というようなもので、「そうすることで、何か問題や困難があっても、喜んで受け入れるような状態」を表わすのに使われています。

第3の特徴は、これまでの話の流れを考えて…、つまり、『**道ばた**』や、『**岩地**』や、『**いばらの中**』と区別されていることから、①聖書のみことばや神様に対して寛容(≒柔軟)で、②感情的な…、言い換えれば波のあるような信仰でなく…、③誘惑にも負けない信仰、とも言えるのではないのでしょうか？

●その原因？

一体、どうして、このような違いが出てくるのでしょうか？⇒今日のみことばの平行箇所である、**ルカ 8 章**

では、こうあります、『**15** しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。』とあるように、まず、心(=態度)が違うのです。彼らは、純粋な心を持って、自分の損得や自分の都合などで、物事の真理を判断しようとはしません！なぜなら、真理とは、自分たちの損得で判断できるものではないからです。そうでしょ？

次に、『それをしっかりと守り…』とあるように、彼らは、知識だけでなく…、行ないが伴っているのです。そして、その行ないは、みことばを実践することだけに留まりません。『**よく耐えて…**』とありますように、彼らには、しっかりと耐えが伴っています。だから、彼らは、苦勞して…、実を結ぶことができるのです。

ですから、例えば、主の兄弟ヤコブはこう教えます。**ヤコブ 1:2-4**、『**2 私の兄弟たち。さまざまな試練**に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。3 信仰がためめされると忍耐が生じるということ、あなたがたは知っているからです。4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。』って…。『**試練**』というもの、その人の信仰を試すものでもある…。』そう、ヤコブは教えます。確かに、今回のみことばであるマルコ 4 章で、イエス様が教えてくださったように、その試練をどのように受け止めるかで、その人の信仰の有無を明らかにする場合もあるようです。また、試練は、私たちに忍耐を生じさせます。それによって、私たちは益々、成長し…、強くなっていくことができ…、それが、私たちに何らかの実を結んでいくことになっていくわけです。

でも、ひょっとしたら、ある方々は、こうおっしゃるかも知れません、「でも、この例えに登場してくる、岩地やいばらの土地でも、実を結ばないまでも、芽を出したりしているじゃないですか？ひょっとしたら、彼らは救われているのではないですか？」って…。確かに、彼らには、何らかの変化があったのかも知れませんが…。しかし、農夫が、種を蒔くのは、何のためでしょう？…収穫を得るためですよ！それと同じように、天の神様もまた、私たちに望んでおられるのは、神様が喜んでくださるような実を結んでいくことです。そうでしょ？もしも、私たちが、「あらゆる努力を惜しまないで、自分たちに与えられた信仰に、徳や知識を…、また、自制や忍耐、敬虔、愛などを加えていくな、あなたがたは、役に立たない者とか…、実を結ばない者になることはありません！」そうⅡペテロ 1 章では教えられてありますよね？

ですから、本当に救われたクリスチャンならば、間違いなく、その人は、神様が喜んでくださるような「実」を結ぶはずなのです。もしも、万が一、そうはならずに、実を結ぶことがないのなら、それは、どこがおかしい、と言わざるを得ません。皆さんも、よくご存じでしょ？イエス様は、ヨハネ 15 章で、「例え、わたしの枝であっても、実を結ばないものは、どうなる？」と教えられました？**ヨハネ 15 章**、『**2 わたしの枝で“実を結ばないものはみな”、父がそれを取り除き、…**』とあります。また、すぐ後のヨハネ 15:6 では、『**だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。**』とある通りです。

V・**神様御自身の、みことばに対する**態度(10-13 節)

最後、駆け足で、神様御自身のみことばに対する“態度”を見ていきましょう！…と言いますのは、神様は、御自身のみことばを…、誰に対しても、全く同じようには明らかにしておられないからです。そこには、明らかに、何らかの差異(=違い)があり…、当然ながら、そこには、然るべき理由があるのです…。最後に、そういったことを、今日のみことば 10-13 節で見たいと思います。そこには、こうあります。**10** さて、イエスだけになったとき、いつもつき従っている人たちが、**十二弟子**とともに、これらのたとえのことを尋ねた。

11 そこで、イエスは言われた。「あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。」

12 それは、『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため』です。」

13 そして彼らにこう言われた。「このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができませんよ。」

ここで、弟子たちは、イエス様のところに来て、「一体どうして、大勢の群衆(たち)には、例えでお話しになられたのですか?」と言って、その理由を問います。だって、話の本題である『奥義』について、一切話さずに、それに関する例えだけを話すっておかしいでしょ?…ちなみに、『奥義』と言いますのは、「昔は隠されていたものが、今は明らかにされたもの」を言います。そういった大事なことについて話さないで、例えの部分だけを話すというのは、簡単で聞きやすいかも知れませんが、その意味している大事な部分が何かを知ることが無いわけじゃないですか! ⇒その理由について、イエス様はこうおっしゃいます、「神の教えを知ることが許されている者と、そうでない者たちがいる」って…。ちょっと意外です…。だって、聖書のみことばは、『神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。』(Ⅰテモテ2:4)と教えるからです。

でも、イエス様は、そういったことの原因について、こう教えてくれています。12 節、『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため…』だ! っって…。当時、イエス様の周りには、たくさん群衆が…、まだ、救われていない人たちが居たにも関わらず、イエス様はある者たちが、「わたしの言葉を聞いても悟らず、悔い改めて赦されることがない…」とおっしゃられたのです。…ますます、分かりません!

でも、今日の平行記事であるマタイ 13:15 で、イエス様は、こうおっしゃっておられます。『この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、目はつぶっているからである。それは、彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟って立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』って…。私は、このみことばこそが、その理由について教えてくれていると思っています。ここで、イエス様は、イエス様の弟子たちを始め、真剣にイエス様の話を聞こうとしない者たちの目が“つぶっているからである…”とおっしゃっています。「目がつぶっている」とは、明らかに、その者たちの選択…、と同時に、彼らの頑なさを教えてくれています。

だから、イエス様は、この場面でも…、あるいは、他の場面でも、「耳のある者は聞きなさい!」と言って、大勢の者たちに、イエス様の語るみことばに対して、真剣に耳を傾けるよう、訴えられたのです…。この当時も、今も…、一体、この世の中で、どれほどの者たちが、真剣に神様のみことばを聞き…、また、自分勝手な理解をしないで、神様のみことばを正しく理解すること…、ただ、そのことだけに努めよう! とする者たちがいることでしょうか?

<励ましの言葉>

皆さん、覚えてくださっています? つい最近、私たちは、この当時のガリラヤの者たちが、イエス様のことを「気が狂っている! (とか) あいつは悪魔の手下だ! いや、悪魔そのものだ!」みたいなことを言って、イエス様のことをさげすんだでしょ?…実は、そういったことが原因ではないでしょうけれども、でも、この時以降、イエス様の宣教活動は、広く…、大勢の者たちに対して…、と言うよりも、今日のみことばで、イエス様がおっしゃられたように、「聞く耳のある者」、特に、弟子たちに対しては、特別な神の真理を教えてください…、そうではない大勢の大衆に対しては、例えでだけ話をされるようにシフトされていったのです。だから、マタイ 13:34 には、こう記されてあります、『イエスは、これらのことをみな、たとえて群衆に話され、たとえを使わずには何もお話しにならなかった。』って…。

どうか、今日、このメッセージを聴いてくださっている皆さんには、その心を頑なにすることなく…、また、自分が聞きたいメッセージを聞こうとするのではなく、神様が、どのようなことを語ってくださっているのか?

神様のみこころが、どういったところにあるのか? ということに、その思いを集中して、イエス様が…、あるいは、この聖書のみことばが教えてくれていることに、その耳を集中してみてください。きっと、神様は、そんな皆さんに、神様のみこころを教えてください…、皆さんのことを祝福して下さることと思います。最後にお祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。